ロマンシングK-ON

深神　護

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ロマンシングＫ－ＯＮ

【Ｎコード】
Ｎ３０４２Ｐ

【作者名】
深神　護

【あらすじ】
けいおん部の５人。
いつもの部活のはずだった…
だがしかし唯の一言から全てが変化していく。
ロマンシングサガの舞台に飛び込んだ皆は様々な冒険や人間ドラマ、友情、愛を確認し成長していく。

ロマサガ×けいおんとか俺得すぎるｗｗｗｗ

連載はぼちぼちやっていくので気軽に見てくれたら幸いです。

ろまさが！（前書き）

※ＳＳの展開上登場キャラのイメージを損なう可能性があります。
気分を害する恐れがありますのでそんな方はまわれ右。
ゆっくり読んでいってね！

ろまさが！

桜が丘女子高等学校のある日の放課後ーー

唯「んー…んぬぬぬぬ…」

紬「どうしたの、唯ちゃん？」

梓「唯先輩、何か辛そうですね」

律「ほーっとけ梓。いつもの発作だ」

澪「だけど…なんだか凄い思い悩んでいるな。あんな唯、ギー太を買う時以来見た事無いぞ？」

唯「ムギちゃん！！」

紬「あらー？どうしたの？唯ちゃん？」

唯「旅だ！！旅に出よう！」

律「はぁ？ゆーい、はぁ…とうとうぶっ壊れたか」

唯「違うよ～！昨日ね、憂と一緒に掃除してたんだ！そしたらゲームが出てきて…ドラクエとか言う奴！」

律「あーあれか。聡もやってたな。なーんかロープレだろ、あれ？」

紬「ろー…ぷれ？」

澪「RPG（ロールプレイングゲーム）だな。役割を演じるって意味だった気がするな…」

梓「簡単に言うと何かの目的があって物語を勧めるゲームですね！」

律「そーそー！…ってお前らどこに向かって言ってんだぁ？ったく…」

唯「そうだよ！でね、皆でロープレやろう！」

律「アベッ！！…あのなー唯、あのゲームは一人用なんだぞ？皆でやるってどうやってやるんだよ？」

唯「皆で旅に出る！（フンス！！」

梓「あの、唯先輩？日本ではモンスターどころか動物で猪とかクマしか出てきませんし、魔王なんていませんよ？」

唯「…あぅぅ」

紬「…唯ちゃん、そんなにロープレやりたいの？」

唯「んー…皆で旅に出たいかなー？私達もうすぐ卒業だし皆でやったぞー！！っていうのやりたいんだもん…」

紬「…わかったわ！ちょっと待ってて！」

一同「？」

数分後ーー

紬「唯ちゃーん！ロープレ、出来るよ！！」

唯「本当〜？！」

澪律梓「…はあっ！？」

どうにゅう！

澪「で…ムギ、落ち着いて話を聞かせてくれ。どういう事だ？」

紬「うん、えっとね…お父さんの会社の知り合いがゲーム会社の社長でゲームソフトを読み込めばその世界に介入出来る機械を作ったみたいなの」

律「ま、マジか…」

梓「す、凄すぎる…」

澪「ムギ、そのソフトは何でも大丈夫なのか？」

紬「うん、一応聞いたんだけどある程度のソフトならその機械は読み取れるみたいだよ」

律「ったく…どんなハッカー集団だってぇーの」

唯「…」

律「唯ー、ゆーいー？…だーめだ、完全に目がキラキラしてるわ」

唯「ムギちゃん！皆！早速行こう！！」（フンス！！

澪「お、おい！今からか！？」

梓「練習はどうするんですか！？」

唯「フフフ…あずにゃーん、そんな硬い事言わずにさぁー。ほらっ、お菓子あげるからさぁー」スリスリ

梓「きっ、今日だけですからねっ！」

澪律「折れた…」

唯「よし、行こーう！」

（あずにゃんもゲーム好きそうだと思ったらやっぱりだね～）

一同「おーっ！」

数十分後…

紬「皆ー着いたわよー」

澪「ここって…」（うわぁ…）

律「あぁ…」（マジかよ…）

梓「誰もが知ってる会社、ですね…」

唯「ロープレーッ♪ロープレーッ♪」

紬「ロ～プレ～ッ♪ロ～プレ～ッ♪」

梓「行きましょう、置いていかれちゃいます」
（興奮を抑えるのに必死です！！）

律「そうだな！なんだかんだ実はあたし、楽しみなんだよなっ！」

澪「私は不安しかないぞ…」ビクビク

？？？？「これはこれは紬様、よくいらっしゃいました。」

紬「やめて下さい様付けなんて…皆もいますし、ねっ？」

???「では…紬さんと呼ばせて頂きます、これ以上は譲歩出来ません」

紬「んー…では、それで我慢します」ブスッ

???「フフフ…では、参りましょう。皆様！こちらです！」

律「よぉーし！ゆい隊員！！全速前進だぁーっ！！」ダダダ

唯「了解であります、りっちゃん隊員！！」ダダダダ

律「うぉー！すっげー！！」

澪「た、確かに凄いな…」

梓「建物も広いですけどこの大掛かりな機械も…」

唯「ムギちゃん！ムギちゃん！これ何これなぁ～に！？」

???「代わりに私が説明しましょう」

紬「みんな～この人がこの会社の専務さん。名前は…」

藤井「藤井といいます。宜しくお願い致します」

一同「宜しくお願いしまーす！」

藤井「この機械はバーチャルインＴＨＥワールド…ｖｉｔワールドと言います。
ｖｉｔワールドについて説明させて頂きます。質問があったら何なりとお申し付け下さい。」

一同「はーい！」

藤井「では…まずこの中央にある機械で体験したいソフトを読み込みます。
そしてこの機械で仮想の世界を作り上げます。」

梓「すっ、凄い…」

律「澪！すっげぇよなこれぇ！」ウハハァ

澪「落ち着け、律」

る、イスに座って頂き
上にある帽子のような機械を被って頂きます。ここまでで何か質問は？」

澪「はい。」

唯「澪ちゃん、やる気満々だね！！」

律「ちげーよっ、澪の奴は怖がりだから聞かないと気がすまないんだよ」キシシ

澪「黙れ、バカ律」

藤井「澪さん、どうぞ」

澪「このゲームをやっている時、時間はどうなるんですか？余り時間がかかり過ぎるなら後日にしたいんですが…」

唯「え～、嫌だよ～、澪ちゃ～ん」

藤井「その点はご安心下さい。ゲームの中での体感時間三時間で現実世界の１０分と同じ時間になります。」

律「なるほど、こうやって廃人が出来上がる訳だ…」

澪「わかりました。後一つ、実際に痛みなどは伴うのですか？」

藤井「はっはっは！その点についてはご安心を！このゲームをやっている間は意識のみ、あちらの仮想世界に取り込まれます。ですから実際に痛みを伴ったとしてもこちらでは無傷です。」

澪「なるほど…わかりました。ありがとうございます！」

藤井「では、そんなところですね。参加する方は…五名で宜しいですか？」

唯「あのームギちゃん…」

紬「なぁに？唯ちゃん」

紬「憂とかも呼んでいいかな…？」

紬「勿論よ！皆でやった方が面白そうですしーねっ、藤井さん？」

藤井「ええ、人数は椅子が最大で１２個あります。その中ででしたら何人でも大丈夫ですよ。」

唯「やったー！じゃー皆にメールしておこう！！」ポチポチ

紬「でもー本当に楽しそうね！私、皆でゲームするの夢だったの～」

律「にっししー。すっごい楽しそうだな！澪！」

澪「あぁ、これなら皆で楽しめそうだ。梓は大丈夫か？」

梓「ええ、皆さんがいるなら大丈夫です。それにある程度のゲームなら…」ブツブツ

唯「ねーねームギちゃん」

紬「なぁにー？唯ちゃん」

唯「何のゲームにしよう？ドラクエ以外にロープレ知らないし…」

紬「そうねー…皆は何が知ってるのあるー？」

澪「うーむ…ＦＦとか？」

律「アタシは…ロマサガとかテイルズとか結構やってるぜー！」
（フンス

梓「幻○水滸伝…（ボソッ」

律「梓、それは無理がある。１０８人も出てこられてもなー」

唯「ほえー…皆結構知ってるんだねっ！…うーん、どうしよう」

藤井「ゲームに慣れている方も慣れていない方もお勧めはございますが四人迄ならドラクエ、それ以上ならロマサガがお勧めでございます」

紬「うーん…唯ちゃん、どうしたい？」

唯「私、ロマサガやりたい」（フンス

紬「唯ちゃん、大丈夫？」

唯「藤井さんが勧めてくれたんだもん。
それに、さわちゃんとか憂とか和ちゃんとかにも連絡したし…大丈夫！！」

藤井「わかりました、では早速準備に取り掛かりましょう。」

澪「おい、唯。和達はいつくるんだ？それに後から来て大丈夫なのか？」

唯「ん～、いつ来るかは分からないけど…皆来るって連絡は来たよ？」

藤井「ならば大丈夫です。私から再度説明しておきましょう」

梓「すみません、ありがとうございます…」

藤井「いえいえ、気にしないで下さい。では皆さん、椅子に座って下さい。準備が出来たら言って下さいね」

一同「はーい！！！！」

数分後――

唯「皆、準備はいーい？」ワクワク

律「もっちろーん！！準備万端だぜい！！」（フンス！！

澪「わ、私も大丈夫だぞ…」

梓「やってやるですっ…！」

紬「藤井さーん、始めて下さーい」ウフフ

藤井「かしこまりました。このスイッチを押すと冒険の始まりです。では皆様、頑張って下さい」

――ポチッ

――ブンッ

唯「うわっ！！…真っ暗だね」

澪「ひいいいいいいぃ！！暗いよおおおおお！！」

律「しっかし、なーんもみえねーなー」

紬「あらあら…」

梓「何か襲って来たりしないですかね…」

「皆様、ゲームについて説明させて頂きます」

唯「あっ、藤井さんの声だ～」

「今私の声は届いていると思いますが皆様の声は私には届きません。」

「では早速説明させて頂きます。ロマサガは色々な仲間と出会い、別れ、様々な物語を進めていくゲームです。」

「まずこのゲームにはオリジナルと若干違う仕様があり8属性が存在します。」

——火　攻撃力に特化した属性
——水　智力に特化した属性
——雷　素早さに特化した属性
——地　防御力に特化した属性

「またここからが上位属性になります」

——風　攻撃全般に特化した属性
——木　サポート全般に特化した属性
——聖　回復魔法に特化した属性
——闇　攻撃魔法に特化した属性

「以上が各属性の説明になります。これはあくまでも設定ですので例えば…聖が攻撃魔法を使えないわけではありませんし、闇が物理攻撃が弱いわけではありません」

「自分で魔法の使い方や得物の使い方を考え、育てていく。そうやって進んでいって下さい。またこれを皆様に渡します。」

梓「これは…本？」

「これはメニューです。わからないことがあればこれを覗いて下さい。
また入手したアイテムの使用、装備の変更やステータス画面の確認。
それに一時中断の時もこちらをご使用下さい。」

律「なぁるほどー…ま、やってみりゃわかるだろ！」

澪「律はいつも適当なんだから…全く」

「因みに皆様は全員が一緒の場所とは限りません。
一人の場合もありますし、二人や三人の場合もあります」

唯「えー皆一緒じゃないんだー…」

紬「まーまー唯ちゃん、皆会えばいいのよ～」

律「そうだぞー唯！一人でも泣くなよー？」

澪「お前もな」

律「泣かねーよぃ！！…ったく」

梓「そろそろ…ですね。」

「では、始めましょうか。目標は八英雄の撃破
そして世界に平和を取り戻す事！」

律「くぅ〜っ…なんだか高ぶって来たなぁ！」

梓「八英雄…真の平和？」

澪「梓、どうした？」

梓「い、いえ…」

（真の平和か、なるほど。だけど先輩方に伝えるのは…）

唯紬「（キラキラキラキラ）」

――キインッ！！

王院歴３５６年ここはシスメリア王国を中心とし栄える王朝である。

唯「おぉ！！空から声が…」

梓「先輩さっきも聞こえたじゃないですか！！これは大人の都合で説明が入るんですよ！！」　唯「おぉう…」

律「な、慣れている…ゴクリ」

王院設立前の降魔大戦――
壮絶な闘いを制したのは連合軍見事魔王を打ち倒し、平和が訪れた。
しかし近年、観測され無かった魔物が観測され始めている。
各地拠点を八英雄が守っており均衡を守っている。
そんな時代…

紬「あらー八英雄ってー…」

世界に…恒久たる平和をもたらさんと、各地の英雄が立ち上がる。

律「うおっ！！なんかとｂ――」
澪「律だいｊ――」
唯「りっちゃんが消えｔ――」
梓「くっ――」
紬「あら～♪――」

じょしょう！（前書き）

ここから色々とキャラごとにステージが変わります。

じょしょう！

―◆―◇―◆―◇―

律「ギャン！！」
地面にお尻を思い切りぶつけた律は思わず叫んだ。

律「いっててー…ここはどこだぁ？ってわかる訳ねぇーかぁー」
到着したところを一面見渡す。すると地平線が見えた。
つまり、見える限り建物がない壮大な草原だと理解する。

律「あーぁ、ドラムセット持ってくれば良かったなー！こんなところでドラム叩けたら最高に気持ちいいんだろうなー
…って持つの重いっちゅーねん！！」ビシッ

ツッコミの動作をすると手に”何か”が当たった。というか触れた。

律「ん？ビシッ？」
斜め後ろを見ると犬のようで犬よりどう猛そうな生き物がそこには存在した。

律「…？あ、アハハハハー…なんか、ヤバい感じ？」
律はゆっくりと立ち上がる。
人間恐怖を目の当たりにすると動作がゆっくりになるのは本当の様だ。

律「伊達にアタシだって聡とゲームやってねーっての。こえーけど。アタシは部長だ！！」（フンス
そういうとドラムスティックを取り出す。

律「アタシはこれしかねーんだよなぁ…なんかこうかっちょえー双剣みたいなのにならんのかね…」ハァ

次の瞬間ドラムスティックは光り出す。

律「うわっ！！眩し！！」
あまりの眩しさに目を閉じる。
手の内に包んであるドラムスティックが少しずつ形状がかわるのを実感しつつ、動きが止まった時点で目を恐る恐る開く。

律「おー！！双剣！！」

両手には柄が青く緋色の水晶が埋め込まれた双剣を握り込んでいた。
刀部分は多少反っており、その輝きは全てを魅了する様だ。

律「おっほほー！！すっげー！！…さてとぉ！！」

犬の様な狼の様なものと向き合う。

律「かかってくるがよいぞぉ！！」
そういうと律は双剣を正面に構えた。

律「…そういやゲームでは慣れてるけどこういう実践的なもの、初めてだけど…なんとかなるのかぁ？」

――◆――◇――◆――◇――

唯が目を開ける前に身体から汗が出始めていた。

目を開け辺りを見渡すと砂一面の世界。一面見渡すも水辺がまるで無い。

唯「ほえー…あっつい！！」

唯「誰も…いないの、かな？」

砂漠を少し歩いてみることにした。

しばらく歩いてみるが景色は一向に変わらない。

歩く度、砂に足を捕らわれ疲労が溜まる。
ある程度歩き、疲れが溜まり座り込む。

唯「疲れたよぅー…」

その時急に、足元から地鳴りが聞こえて来て大きな地震が来たような感覚になる。

唯「はわわわっ…な、何？」地面から砂が立ち上がったと思うと中から巨大な生き物が現れた。

？？？「ピィギャアァァァッ！！」

唯「」

全長はゆうに１０メートルを超え砂色のサボテンの様な
それでいて蛇の様な形状であった。

唯「うーっ…ギー太ぁ…」
唯がそう言うと、光が手元に集まり始め
辺り一面が光により白くなりギー太が現れた。

唯「ぎ、ギー太ぁ！！会いたかったよおぉっ…。」ギュウゥゥゥッ
ギー太を手に取り、立ち上がる。

唯「ギー太がいれば負ける気がしないっ！！さぁ、来いっ！！」
（フンス

？？？「ピィギャアァァァッ！！」

だがしかしこの時唯は全く考えていなかった…そう。楽器で闘う方法など微塵も考えていなかったのだ。

？「――ハアァッ！！」
声が聞こえサボテンヘビの動きが止まった。
次の瞬間大きなうめき声をあげ真っ二つにそれは裂けた。

？？？「ゲゲーッ！！」

？「大丈夫ですか？唯先輩」
立ち上がる砂ぼこりの中から
声が聞こえ、人影が見える。

姿を確認するまでも無く声と呼び方から
その人物を特定するのにそう時間はかからなかった。

唯「…！！あずにゃーん！！！！！」ギュウゥゥ

梓「ち、ちょっとやめてください！あついです！！」

唯「えへへーごめんね、あずにゃん」

梓「まぁ、唯先輩が無事で良かったです…
それで…何でギー太持ってるんですか？」

唯「それはね、ギー太が呼んだら逢いにきてくれたんだよ、あずにゃん」

梓「」

澪「…さむさむさっむうううううう！！」

―◆―◇―◆―◇―

一方、澪が着いた先は雪が降りしきる雪原。

体感温度で言うと－５℃位だろうか。

澪「へーっ…こっちの仮想空間でも温度は感じるのか。痛みは…」

ガチガチ

そう言い自分のほっぺをつねってみる。

澪「うーん、現実世界よりは痛みはないけど引っ張られているという実感はあるな。

という事は実際に攻撃を受けたら…痛いんだろうな。

まぁいきなり敵が出てくる何て事は…」

そういい辺りを見渡すと、前方より身の丈

二メートルはありそうで雪男の様な

形状のものが姿を表す。

澪「ひいいいいいいいっ！！」

最初は一体だったのだが、次第に増えていき
気が付くと周りを取り囲まれていた。

澪「（、　。ω　。、）…バタッ」

声をあげる事も出来ずその場に倒れ込んでしまった。

――◆――◇――――◆――――◇――

ムギが目を開くと一面に広がる木々。またその付近には様々な植物や昆虫が視界に入ってくる。

紬「あらあら～、ジャングル！…どうしましょう～」

紬は冷静に状況をみる。
冷静なのかマイペースなのかはわからないが辺りをゆっくりと見渡す。

紬「こんな時は…じゃあ～ん！！説明書を見ましょう」

そういい紬はメニューを取り出す。ヘルプの項目を確認する。
紬「ふむふむ…つまりこの世界に連続していられる時間は１００時

間。
その後は２４時間の休憩が必要なのね～…。現実世界に換算すると…何分かしら～？」
※因みに現実に換算すると
三時間＝１０分なので約六時間である。
紬「また敵に敗れると三日間のログインが不可能で…あらあら～。どうしましょう～」
※敵に敗れると自動的にログアウトとなる。
その地点でセーブとなりその時間から現実の時間で７２時間のログインが不可能になる。
またイベント戦やボス戦に敗北するとペナルティーとしてセーブが消え最初からとなる。
その場合、魔法の属性は切り替わり新しいキャラクターステータスが振り分けられる。

紬「むむっ…成る程！！武器は念じると自分に合った武器が精製される…
一体何が出来るのか楽しみだわ～」ウフフッ
紬は手を出し目を閉じる。
辺りの光が強くなり始めた…
徐々に光が形を創り、それがムギの手元に作られる。
紬「これは…弓？」

ムギの手元に現れたのは長さ６０センチ程度の弓であった。

紬「あらあら～…これ、矢が無いわ。どうしましょう…」

ムギの弓には矢が付属されておらず、弦の部分には弓本体の部分と同じ
材質が使用されており、矢を発射出来るものでは無かった。

紬「まぁ、なんとかなりますよね。では！冒険の旅へれっつごーですっ！！」（フンス

そう言った後ムギが念じると弓は跡形も無く消えた。
先程ヘルプ欄にあった項目を全て読み、一通りの［操作方法］は身に付けていた。

――◆――◇――――◆――――◇――

一方その頃

？1「ここで、いいのかしら？」

？2「はい、お姉ちゃんがここにいるって聞きましたから。」

？3「ここって…世界に流通する大企業なゲーム会社じゃない？本当に…いるのかしら？」

？1「まぁ、間違いないなら…いいんだけどね。行くぞおめぇら！！」

？4「テンション高いな～」

じょしょう！（後書き）

◆◇◆◇

りつ！Part1

律「随分とこいつの扱いにもなれたなーしっかし…」

律は基本的にマニュアルを読むのが苦手、というか嫌いだった。最低限の部分だけ読み、何事も経験に重きを置くタイプである。

教科書では間違いなく太字とその前後だけさらっと読むタイプである。

律「まぁー大体覚えてきたし、ダメージを受けるとビリッ！！て電気が走る感覚とレベルが上がる感覚だけは慣れないんだよなぁ…」

そう言いつつ律は歩き出す。

しばらく歩くと城が見えてきた。大きな城で城下町がその5倍程度の敷地を誇っている。

律「なーんか千葉にあるのに東京って名乗ってる所に似てねーかぁ？…と、とりあえずご飯食べたい！！腹ペコだぁーっ！！」

そう言い律は城下町に走り出す。そして門番をかわし、城下町に入った。

律「うひゃー……広い！！」

律が街を見渡すと商店や民家
教会から宿屋まで一通りの設備は整っている様だ。

律「まずは…」へへッ

律は民家に入り、タンスをおもむろに開ける。

―律は回復剤を手に入れた―

―律は１０ゴールドを手に入れた―
―律は５ゴールドを手に入れた―

律「やぁーっぱな！！ＲＰＧの王道、家宅捜索だぁーっ！！」へへへッ

こうして律は城下町に着き、民家を一つ残らず調べて廻る事に時間を費やした。

律「結局、民家を廻ってたら日が暮れちまった…チェッ。しゃーねー…今日は宿屋で寝るか」

宿屋に向かっている途中に夜中に開いている商店が目に止まる。
律「なんだここ…ふむふむ。［街一番の品揃え！！ロマリア武具店］…か。入ってみっかな」

口に出しながら足は勝手に動き店内へと向かっていた。

店主「らっしゃい！！…おや？嬢ちゃんがこんな所に何の用だい？」
体格がよく、立派な髭を生やした店主が話し掛けてくる。
ジーンズ色の前掛けが嫌なぐらいに似合っていた。

律「ん？何だ、おっちゃん？まぁ店員さん…だろうな（笑）」
そう言い律は店主を見る。
店主「ったりめーよ！！それに俺は店員じゃない、店主だ」（フンス
店主は胸を張り、どうだと言わんばかりに鼻から息を出した。

律「店主がどうした！！あたしゃー田井中律だ！！戦士だぁ！！」
（フンス
律も負けじと胸を張りどうだと言わんばかりに双剣を前へ突き出し

ている。
この光景を周りからみれば明らかに盗賊である。
店主「お…なんでぇ嬢ちゃん！！こりゃ失礼した！！何か買い物かい？
…ってか何で武器が剥き出しなんで？」

店主は小首を傾げながら双剣を指差し、律に質問を投げ掛ける。

律「…へっ？これしまえるの？」

律は目を丸くして店主に質問を質問で返した。

店主「なんでぇ嬢ちゃんそんな事も知らないでこれから先進もうってのかい。
…よしわかった！！俺がこれから説明してやる。ちょいと長くなるがいいか？」
店主はどや顔だ。

律「うーん、メニュー見る気にもならないし…頼んでいい？」

店主「よし、わかった！！一回しか言わないから良く聞きな！！」

――

●武器は［出ろ］［戻れ］と念じるだけで出し入れが自由である。
●武器は基本的に販売していない。
●武器は鍛冶という形で鍛え上げていく。
敵の武器を奪うスキルか戦闘後のドロップで鍛冶材料や武器を入手出来る。

●防具はレベルが上がると同時に性能が向上する。また防具は宝箱や敵からのドロップで入手出来る。

●プレイヤーが武具店で行える事は［鍛冶］［錬成］［合成］である。

●［錬成］は特定のアイテムを武器や防具に埋め込む事が出来る。
●［合成］は入手した材料を合わせる事で新たな武器の形状へと変化する。
因みに武器の場合、ベースアイテムが必ず所持している得物になる。

店主「…ってなとこだ。質問はあるか？」

律「いや、イッパイイッパイデス…」
頭から煙が出てオーバーヒートしそうな状態になっていた。

店主「ガッハッハ！！まぁ一気に覚えなくてもいい。
今説明したところはヘルプの武器欄に載ってる。忘れたら見りゃい

い」

律「んにゃ…とーりあえず宿屋で寝るっ！！」

律はこれ以上頭を働かせる事が出来ない。

店主「あいよ、何かあったらまた来いよ！！後、明日起きたらとなりの魔術店に行った方がいい。」

律「魔術店…？あんがとさーん…」

フラフラになりながら律は武具店を後にした。

律は戦闘の疲労、長時間の旅、城下町のタンス漁り、武具店の親父の長い話に疲れきっていた。

律「おっちゃーん、いくら？」律の目は完全に座っている。

宿屋「１２ゴールドだ」

――チャリン

律はカウンターで支払いを済ませ

フラフラと歩いていく。

宿屋「お、おいおい…大丈夫かぁ？一番手前の部屋だぞ！！」

律「…ぁーい」

部屋に入るまで疲れきった律の背中は疲れきったＩＴ土方の背中を彷彿とさせるオーラをも纏っていた。

――翌日

律「…ムン」

気が付くと太陽が昇り、光が差し込む。

律「あちゃー…昨日このまま寝ちゃったのかぁー。」

後ろ頭をかきながらばつが悪そうに起き上がる。

太陽は頂点に昇る少し前…

時刻でいうと１０－１１時頃であろう。

律「うっしゃあぁぁ！！行くかぁ！！」

そう言って律は先日武具店の店主が言っていた魔術店へと向かった。

魔術店は辺りとは明らかに雰囲気が違っていた。

ゲームであればお化け屋敷や幽霊の城に入るような音楽が流れる雰囲気である。

律「ぁゃぃぃ…」

辺りにはドクロを模した物や紫を基調としたレイアウトには言葉を失う。

律「ま、まぁ入るか…」

律「さてと…しっかし外だけかと思ったんだがこりゃあ…」

中に入ると大きな壷が見える。

五右衛門風呂より大きくこんなに何を入れるのかと思う様なサイズ

である。

？？？「デュフｗｗｗデュクシｗｗｗｗｗｗ」

律「…笑っ、てる？」

？？？「デュフｗｗｗｗｗｗグフフフフフッｗｗｗ」

律「…さ、さぁーってと！！打倒、八英雄！！いくぞー！！！！」

オーッ

後ろを振り向いた瞬間
目の前に全身黒い服に身を包み、タクトの様な物を持った美人が現れた。

律「」（これは絶世の美女だ…）

？？？「デュクシｗｗｗｗｗｗいらっしゃい」

律は驚きより余りの美しさに見とれてしまった。

律「…笑い方以外」ボソッ

？？？「久しぶりのお客様だねぇ…デュクシｗｗｗｗｗｗまぁ、座ってくんな」

そう言ってタクトを軽く振ると律は浮かび上がり椅子に座らされた。

律「わっ！！わわっ！！…何だぁ今の…？」

？？？「お嬢ちゃん、これｗｗｗ魔術ｗｗｗｗｗデュクシｗｗｗｗｗ」

律「…んー！！なんかムカつくぅ」プーッ

？？？「あ、ごめんね…最近風邪が酷くて…デュクシｗｗｗｗｗ許してね、デュフｗｗｗ」

律「ってそれ風邪かいぃっ！！」ピシッ

？？？「改めましていらっしゃい。ルージュの魔術店へようこそ」

律「あ、ども。アタシは〜田井中律！！律とか律っちゃんとかでいいぞ！！」フンス

アマンダ「いやｗｗｗｗｗアタシはアマンダｗｗｗｗｗゲヒｗｗｗｗｗ」

律「んぁー！！なぁーんだってんだよぉもう！！」

アマンダ「ゲヒｗｗごめんねｗｗｗで、どんな用件？」

律「あ、そだそだ。武具店のおっちゃんが行けって行ってたから来たんだったよな、確か」

アマンダ「……アナタ。」

律「ふぁい？」

アマンダ「…アナタ、もしかして、魔法についてまだ何もわからない？」

律「」テヘペロ☆

律はばつが悪そうに舌を出した。正確には、８属性までは辛うじてわかる。
ただ、魔法をどう使うのか？魔法と魔術の違いがなんなのか…
正直全くわからなかった。

アマンダ「はぁー…なら説明してあげる。事務的に。よく聞いてね」

律「オネシャース！！」

アマンダ「コホン…では始めます。」
●魔法とは身体の気を練り、体外に直接的にだす呪文である。
（攻撃呪文や回復呪文）
●魔術とは身体で練った気を体内で使用したり、またその気を他の物に使用する魔法である。

（補助系魔法や属性付与）

●自分の属性を判別するには戦いの中で精神を統一すると自然と使える。

また判別器具も存在し、各地の魔術店や魔法店に存在する。

アマンダ「…ってなところかしら。デュクシｗｗｗｗｗｗ」

律「うん、何となくわかったぞ！！しつもーん！！」ピシッ

アマンダ「なーに？田井中律」

律「（何でフルネーム…）他の属性の魔法は使えるんでしょうか？！隊長！！」

アマンダはそれまでにやけていた顔をやめ、真剣な顔つきになった。

アマンダ「一つは…適性。突然変異で覚える事があるの。一定条件をクリアすれば使える様になる。あとの一つは…」

そういってアマンダは下を向く。

律「んっ…？オーイ、アマンダさーん」

アマンダ「…あなたが未だ知る必要はないわ」

律「へっ…？何で？」

アマンダ「…今のあなたには、無理。それしか言えないわ」

絶対的な否定。

確実に何かを知っているからこその否定。それを律は感じ取っていた。

だからこそ、聞くことを躊躇わざるを得なかった。

律「あ、あぁ…わかった」

アマンダ「でも、最大で使える属性は４属性。

あ、ちなみに田井中律が使える属性でも調べておこうか」フフフ

先ほどとは一変したおどけた表情で喋りだす。

律「おーいいねぃ！！…んでどうやって調べるんだ？」

器具と言っていたがそんな器具はどこにも見当たらない。

目前にでっかい壷があるがあれな訳がない。

アマンダ「あの壷よ」

律「ヒイイイイイィィッ！！」

予想は的中した。

アマンダ「あの壷に向かって手を当てて心のそこから念じるの。

壷を壊すイメージで。決して目は閉じないで、壷の入り口を見てい

なさい」

律「」コクッ

律は右手を伸ばし、手のひらを壷に押し当てた。

（壷、壊れるったってどんな風に壊れるんだろう…。
壷が割れる…かなやっぱ。壷が割れる…壷が割れる…）

律「壷が……うわああぁぁあれるうぅぅぅッ！！！」

その刹那、壷の口の部分から大きな音を立てて雷電が発射される。

律「まぁ…シャレにならんわな」
正直腰が抜けるかと思った。

アマンダ「あなたの属性は雷よ、田井中律」

律「雷か～…まっ、らしいっちゃらしいんだけどな～っ」
律は不満そうに答えた。

アマンダ「あなた、雷の属性であれだけ大きなスパーク出しておいて何が不満なのよ…」

律「もっと王道の炎とか闇とかこう…かっちょいいっ！！って奴が良かったんだよなぁ～…」

アマンダ「あのね、雷は普通速度に特化してるから補助系であんな大掛かりなスパークはでないのデュフｗｗｗｗｗｗｗ」

律「へぇ～、そなんだ」

アマンダ「まぁ、珍しい例ではあるわ。使い方は自分で考えて。後、新しい使い道を思いついたときは技リストに技が追加されるの。名前は自分で決められるから、好きにつけていいわ」

律「お～なぁるほど…アマンダさん、何から何までありがとうございやした～」ペコリ

アマンダ「良いってこと、アタシも珍しいもの見れたしおあいこね。ちなみに次の目的地は決まっているの？デュフｗｗｗｗ」

律「目的地かぁ～…あ！澪達を探さなきゃ！！」

アマンダ「澪？」

律「一緒にゲームを始めた仲間なんです！！やっぱり部長のアタシが皆をしっかり支えてやらないとなぁ～…手のかかる部員たちだ」

フンス

アマンダ「フフフ…北にここよりかは小さいけどこの大陸の中心部になる街がそこにはあるわ。言ってみたらどうかしら？…でも、あなたも手のかかりそうな部の一人みたいなんdデュクシｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ」

律「じゃ、アマンダさん！！どうもありがとうございました！！」

アマンダが話している途中でいても立ってもいられなくなったのかその場で

駆け足をして今にも北の街に向かわんとしている。

アマンダ「気をつけて、また会いましょう」ニコ

律「あぁ、またぜぇったいくるかんな！！」ブンブン

律は北の街へとひた走る。

走れメロスのごとく。

――――北の街・道中

律「〝雷〟の使い方かぁ〜…なんかあるかぁ〜？」テクテク

律は雷の使い方について考えていた。

律「あれだけ大きな雷見るとなぁ〜…」

ＭＯＢ「グルルルル…」
銀髪の狼である。
律「おっつ！！早速現れましたな。雷、ねぇ～…雷は早いんだよな。そしたら…身体全体に…」
律が念じると身体全体に黄色のオーラをまとった。
――ヒュン
次の瞬間、律は狼の尻尾を掴んでいた。
律「おっほー！！本当に早くなった！！たっのし～！！！！」
ＭＯＢ「ギャワングルルルルｒ」
律「これは名付けて【Ｓモード】でいいかな。はいはい…分かったよ」
そういうと瞬時に離し元の位置に戻る。狼は余りの速さに狼狽している、狼だけに。
律「うーん、これ思ったより体力使うな…魔力一つ、魔術二個は欲しいからな。
悪いけど、ちょっと実験に付き合ってもらうぜ～」
律が双剣を出し頭上で交差させ念じると雷が発生する。
律「【魔法剣・双電】…んー我ながらカッチョイー！！」

律「さて、こいよ？やっこさん」

ＭＯＢ「ガアァァウ！！！」

律が頭上で交差した剣をそのまま前へ突き出すと狼と双剣が衝突する形になった。

狼が噛み付いてこようとした瞬間、剣と接触し身体をビクビクさせながら横っ飛びしていった。

ＭＯＢ「キャウンキャウン！！」

律「えっと…こいつって、もしかしなくてもバカ？」

そうしているうちに狼は立ち上がり、こちらに向かおうとしている。

ＭＯＢ「ギャグルガオー！！」

律「あ、ご、ゴメンナサイ…じゃあケリ、つけようか…っ！！」

双剣をしまうと右手首を左手で握り前へ突き出す。

ＭＯＢ「がああああああああああああああっ！！！！！！！！！」

律「ラインスパーク！！！」

律が唱えた瞬間に右手から腕２本分の雷が出た瞬間に狼は既に丸焦げになっていた。

律「一丁上がり・・・かな」

律の顔は一連の戦闘で疲れ切っていた。

律「まぁ、自分の力が知れただけでも…もうけもん、だな。
体力が１００としたらＳモードが１０、魔法剣・双電が５、ライン
スパークが…
２０ってところだな。…もうちっと体力つけよ」　ハァァ

律「とりあえず…歩くか。皆と合流しないと。」

りつ！Ｐａｒｔ１（後書き）

――律一章　完

律

属性　雷
装備　双剣
防具　桜ヶ丘高制服

技
・Ｓモード
対象者の速度・反射神経及び身体能力を数倍に上げる

・魔法剣・双電
武器に雷の力を付与

・ラインスパーク
腕より強烈な電気を放電し、光の速さで敵を襲う

みお！Ｐａｒｔ１

澪「ん…んんっ」
澪が目を覚ますとそこはベッドの上。
ただ、そのベッドは通常サイズの物ではなくキングサイズ２つ分はあるかと思うサイズで
その中央に眠る姿はさながら人間のベッドに眠るリ〇ちゃん人形である。

澪「何だこのサイズ、尋常じゃないぞ…？」
いそいそと起き上がり、ベットから降りる。
辺りを見渡すと天井は岩肌である。
風などが全く無い事から洞窟と予想できる。

澪は先程の事を思い出してみる。
澪「えっ、と…気が付いたら雪原にいて…雪男を見つけて…囲まれて…あ！！」

そう澪が叫んだ瞬間、地鳴りが聞こえ始める。
？？？「オージョーチャー！！ゲンキナッタ！！」

身の丈４Ｍはある、体毛がもじゃもじゃな大男が現れた。
澪「ちょおおおお！何だよこれえええぇ！！」

？？？「オジョーチャ！！コッチャコイ！”ムラオサ”、ハナシアルダ」

そういって大男はこちらに走って近づいてくる。
澪「ひいいいいいぃ！！」
あまりの恐怖に澪は逃げだした。
？？？「ジョーチャ！！ナンデニゲル？？」ズンズン
澪「お、おっお前が追ってくるからだろっ！！！」ダダダダッ
？？？「ジャオワナイ。ダカラトマッテ」ピタッ
澪「え、あぁ…（とにかく助かった。なんなんだ、一体？）」
？？？「”ムラオサ”イマカラ、ヨブ。ココデ、マテイテ」
澪「あ、あぁ」ガクガク
恐怖と戦いながら澪は待った。あのサイズであれば
ムラオサと言う物は間違いなくあれ以上である。
既に見上げるのに辛いのにあれ以上大きければ間違いなく逃げる。
それは何時間とも思える時間にも感じた。
？？？「ジョーチャ！マタセタ？”ムラオサ”こいつ！」
ムラオサ「お待たせしました、お嬢さん。立ち話もなんだ
よかったらこちらで話さないか？」
予想に反してムラオサは澪よりわずかに身長が高い位の
とても顔が整った女性だった。

思わずその美しさに見惚れてしまった。

ムラオサ「どうした？お嬢さん、早く行こう」ツカツカ

澪「は、はひぃ！」ダダダダ

ーーームラオサの間

ムラオサ「さ、座って？」ニコ

澪「は、はい…あっ、あのっ？」

ムラオサ「ん？質問かな？はい、どうぞ」ニコ

ムラオサは笑顔が絶えない。
笑顔が張り付いた様な顔だ。

澪「ここはどこですか？そもそも…」

ムラオサの話によるとここはイムサコールドという地域。
そして先程の雪男の様な物はフロストという種族だという事。
ムラオサはフロストでは無いのでとある都合でムラオサにされたらしい。

更に魔法や武器の扱い方にも教えて貰う事になった。

ムラオサ「よし、ではお嬢さん、一旦食事だ。その後に開始する」

澪「ありがとうございます！…あと」

ムラオサ「何だい？」

澪「…澪です、名前」

ムラオサ「…はっはっは！これは失敬した！では澪、食事にしよう」

澪「はい？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3042p/

ロマンシングK-ON

2011年1月13日01時51分発行